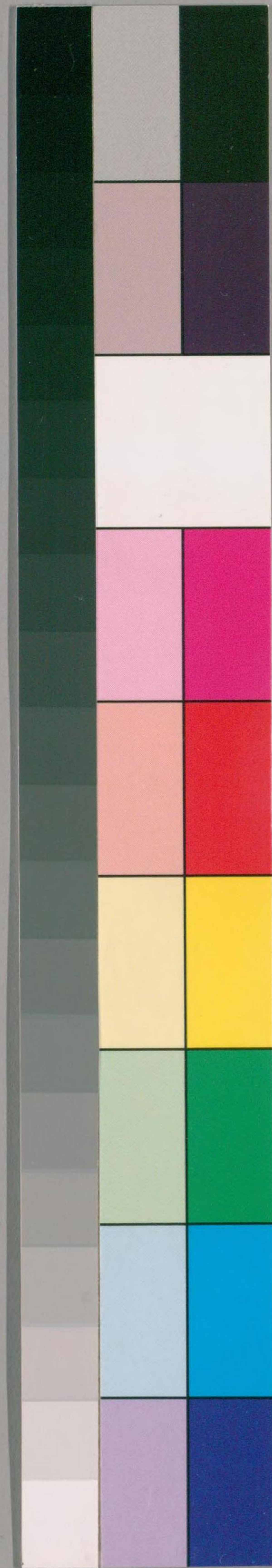


桃青翁句彙後編

全

863
127

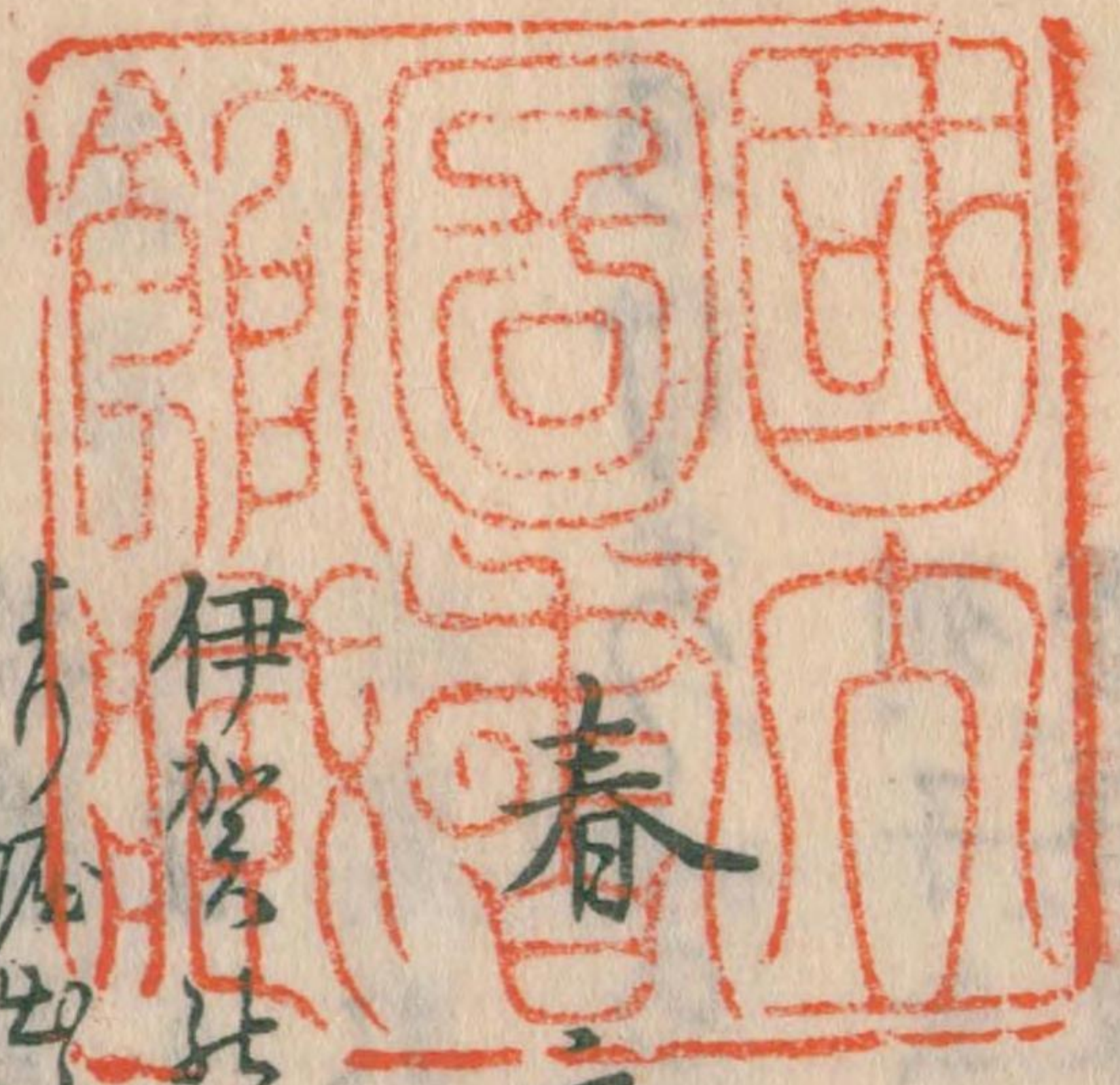


国立国会図書館 タイトル『桃青翁句彙後編』 請求記号 863-127

ガラス使用

863-127

増註桃青翁句彙



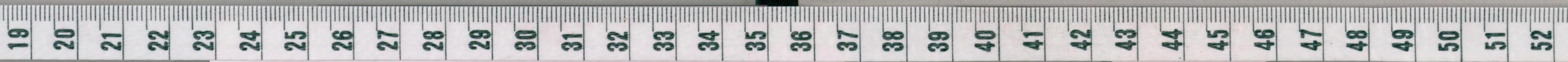
春之部

伊賀山家千うにこつものり土の底
ありて薪とほまゑみであらきあり

香子ふにけうにちの梅はる花

五雜俎云蜀有_二不灰木_一燒之則_五然_五良久_一而火滅
依然_五木也_一又云魯孔_二林_一聞亦有不灰木取以作
爐置_二火輒洞_一赤_三但余未_二之見_一耳此皆奇物也

奥陽仙臺巢居註撰
淡海台林鹿于當増註



梅咲てよ後こふ鳥乃く〜た哉

日中梅影直風静鳥聲圓カキ

春那れや名もなき山に乾くすこ

拾遺集

なかりやう山遠い〜かきみつ
ねはつう〜のまきさるまきつ那

うけろふの家肩りたけ紙ぶく那

列子云昔者宋國有田夫常衣緇縑僅以過冬
暨春東作自曝於日不知天下之有廣廈
綿纈狐貉顧其妻云負日之矜人莫知者以獻
吾君將有重賞云云

袖よ〜〜〜田螺お延きひま〜〜

千五百番歌合 後鳥羽院

さのをたさ〜のまか〜むあらんも
ま〜〜に袖乃ひまのな〜まて

ね〜〜へや齒子食あて〜海苔お砂

飯裏忽逢砂一粒

あ曾お情を〜や生ぬ〜くまの〜

方于詩 寒岩四月始知春

〜〜〜や柳の〜〜活教お前

杜律

野寺垂楊裏春畦亂水閑
美花多映竹好鳥不歸山

志良七重七重 伽藍 八重さくら

立圃白ふハ坂の塔はあつりの花と御あつ

名もハ坂塔ハ五重ヤハ八重さくら

水白くさ甘年を結くか人土芳と

大仙寺ふあそふ

命さくら 中子活くさくらさくら那

古今集

まじりてこれのさくらハあつあつ

あひらんあつあつ命なりりり

物皆自得

花ふりあふ 蛇あつあつを友さくら

鶴の巢もさくらあつあつ乃さくらあつあつ

俊頼子

さくらあつあつあつあつあつあつあつ

あつあつあつあつあつあつあつあつ

専吟餞別

鶴の毛はさくらあつあつあつあつあつ

王恭美姿儀人多愛悦目之云濯々如春月

柳嘗披鶴筆涉雪行云云

蝙蝠もあつあつあつあつあつあつあつあつ

とらけりしれはかく

おのひりりてする救珠のまはかりとて

ねかえすたすもふあふりさう那

とみゆるをてはたきをけりてあまのうらを袖に

けりてあまのうらを袖に

種はうと里を何とあまのうら

行尊子

おもとらうとてててて

かひとててててて

山にへる餅こき冷糸桃のうら

實方子

このお乃りらあかか

とけりてあまのうら

夏之部

清くすん耳お香炬てかこき

宗紙は師の書お解り香をたきあけて香を

とて又山谷詩 隠几香一炷 靈臺湛空明

京子居る京をうら

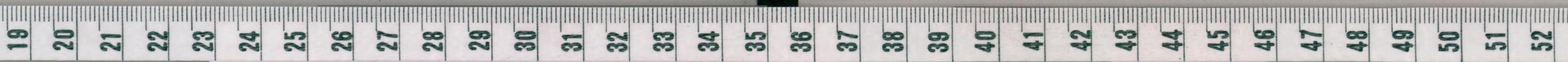
山家集

その中を捨ててえぬら

とてとてとてとて

嵯峨

子規大竹とてとて月夜



唐彦謙詩 杜鵑枝上月三更又云子規啼落西山月
木うろして系摘もつや 杜宇

為山祐禪曰摘茶謂仰山曰終日摘茶只聞子聲不
見子形仰山撼茶樹一下師曰得其用不得其體

しとあききほり 様ふや 霍と
かききすき 様ふや かのき

詩 杜宇呼名語巴江學字流

山家集 大井川少くくの山のふとくき
あやまにあはまきくほり

おもひおとよもるや 日月の様うる

六如菴詩 老樹花開夏似春

俊頼平

志まのあふもる 様うる
風入りしりにはまきくほり

椹の字やいれふれ 椹は母とて酒

蔡順拾椹養母黒者奉母赤者自食云云
本朝食鑑云桑椹狀似莓而圓長生青熟紅有
甘涼無毒釀酒而飲之能理百種風熱云云

竹睡日

竹もも 中しゆり 竹もも

曾茶山種竹詩

近郊蓄竹樹手種滿庭隅餘子不足數此君何
可無風來當一笑雪壓要相扶



甲斐の心山家より三下りあつて
り約はまゝをくさむやうりか

山家集

山しうおのみにほふる
弱よのうらみもる旅の

山賊乃おしうい閉るむらうか

東方朔云居溪山間積土為室編蓬為戸云

舟のまや稚きととれたの終はと

李賀新竹詩云君看母笥是龍才更容一夜抽
千尺

病中自詠

髪もくく容顔蒼々一五月雨
夏は月所油くく赤坂や

賈島詩 頭髮梳千下休頼帶瘦容

此向八丁也奇

あはほのくく赤坂乃

破れ古ふり彩やうらみか

文選 日下壁而沉彩月上軒而飛光

はくは解 足くひのけるはあ

詩 籬落罅間寒蟬過莓莓石上晚蛩行

夕くきやあくくよとむ浪の香



西ノ象集

さけらうこの櫛ハ根さうのしんをいへ
あきのうしうくつすのしんをいへ

雪芝の庭よ松をうへる松とて

涼しやとてお脚の松枝の影

李白詩 六月買松風人間恐無價

少倉山常新寺あり

まの杉をいへとて松のうへる音

儲嗣宗詩 松杉風外乱山青曲几焚香對石
屏

秋之部

尾まのうらみ海うらみとて

秋のうらみとておもひを雲まのうらみ

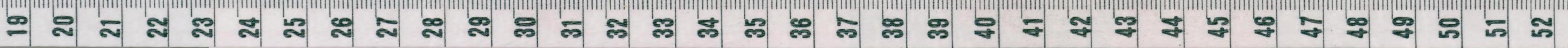
手かきとてぬきよおりのあうらみ
人あうらみとて袖うらみ

心髪ぬく海とておもひとて

白氏文集 霜夜老病翁暗聲啼蟋蟀
中夜亭

あうらみとておもひとて秋やまのうらみ
あうらみとておもひとて

を田の社とて実をうらみとて
をいへ



むしんやふ甲お下のちんくす

此句は、あつちかむしんやふと作りまうはまうく
くくくくくくは是等の文句にうて作りまうをうり
その以ては、文句とて作りしは、いふは、いふは、いふは、
ねは、や、月、の、こ、こ、夜、中、納、言、い、ま、い、ね、も、あ、そ、れ、入、物、の
音、い、ま、其、其、角、の、音、の、り、や、ね、の、よ、の、鳥、の、き、を、
き、い、ま、の、文、句、と、い、ま、い、ま、

床よりまて 軒よりまて 蟬 蟬

詩經 五月斯蚤動 六月莎雞振羽 七月在野
八月在宇 九月在戶 十月蟋蟀入吾牀下云云

綿花もや海の面浅ひくめうす

東坡詩 雨過湖平 江海碧 電光時 掣紫金蛇

あつちかむしんやふ甲お下のちんくす

信 あつちかむしんやふ甲お下のちんくす

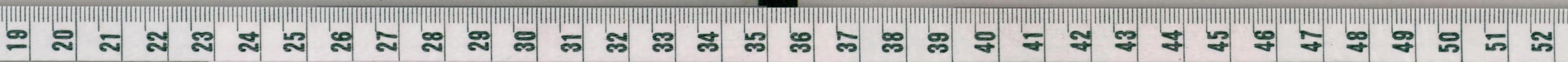
後成乎
あつちかむしんやふ甲お下のちんくす
あつちかむしんやふ甲お下のちんくす

萩原 やしとねハ やしとねハ 山の火

風動葉聲 山犬吠 一家松火隔 秋雲
閉園の況らし

朝うらや 夕うらや 須お海と門の垣

元政草山集云 不幸憂沈而剃頭 逃世者吾
不欲焉 唯願寂寞杜門 無待送日矣



画賛

まゝもあはれおのゝ移り

拾遺伊勢歌

うららかにあはれおのゝ移り
まゝもあはれおのゝ移り

本居宣長の舊草紙の敵の人の對に

まゝもあはれおのゝ移り

の家

うららかにあはれおのゝ移り
まゝもあはれおのゝ移り

佐々木月信の家の家風

呂居仁詩 破箬笠前江島里無入曾識此家風

清く静く

月影を清く静く海の底

賈島詩 山鐘夜度空江水汀月寒生古石樓

月影を清く静く雨を待つ

張仲素六言詩 寺秋山靄蕭蒼樹色猶含殘雨

又云妻とのとちやふらん日向の日向
妻とのとちやふらん日向の日向
あはれおのゝ移り

月影を清く静く

明智實記云 志美いま浪人としてありし家風



うりくると連勢師紹巴とまゆりてまきあをむひくると
客の答もちかるとまゆりふかの妻髪を切て代をうりて
そゆくとまゆりてふりくると

列女傳云陶侃母清貞也鄱陽孝廉范達寓病於
侃時大雪母乃徹所卧新薦自剗給其馬又密截
髮賣與隣人供者饌達聞之歎息曰非此母不生
此子云云

瑣明て月けり入よ浮御堂

浮御堂は志賀郡望田ふあり傳ふとむう源信
信却横川の山岳より湖を眺らふふおぼえの
赫たりけり此浦ふあり漁者の網をおらふふ
貴人の一才ふは阿弥院の像をたくり其の黄金
佛と腹内子養ふとある事ふ一千疋とある一湖
中に御堂と造るる塔より橋をかけて通ふあり

名月や門かけりては漁り

張司業詩 漁家在江口潮水入柴扉

枝や命をわらひむさるか

處默詩 路自中峰上盤回出薜蘿

望田

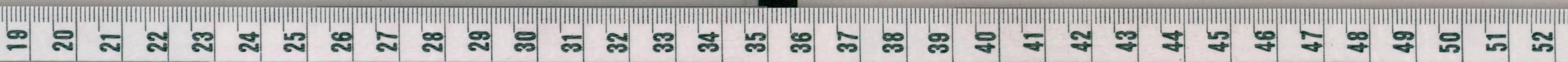
病存の秋をうりて

江湖集云 長空雁影沉寒水老去病深無奈何

漁の漁火とらふ題

篝火り河麻や浪のむせむ

食鑑云形類小鯰而微小腹下黄白背上青黒



帶黃腮下有二橫骨兩鬚極細群游作聲如蛙蚓
之吟歌人詠之為山川閑寂之賞魚尾鱗有聲如
磬音又云用鮎字漢丘仲聞鮎鳴作笛後世漁人
吹笛聚魚鮎此類也

予さうくと小石流く山川よぬらうく川無
やうく水竹の内り

藤 弓や琵琶さうくさむ水の内り

王貞白詩 道院竹繁教略洗鳴琴酌酒看扶桑

さうくさむとさむ水竹の内り

さうくさむけ九もちり一菊は花

籬下黄花時欲發可知明日是重陽

山家集

さうくさむけ九もちり一菊は花

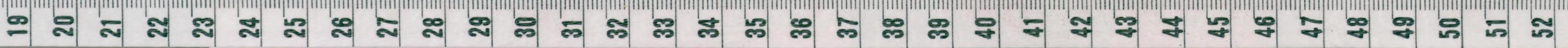
秋十とせりて江戸とちりて郷

客舍并州已十霜歸心日夜憶咸陽無端更渡
桑乾水却望并州是故郷 又寒山詩 十年
不得歸忘却來時道

留別

おとさうくさむけ九もちりて郷

江淹別賦 怨復怨兮遠山曲去又去長河濱
郎士元詩 共是悲秋客那知此路分



秋ふらに隣に竹をさす人そ

菅家詩 池邊別業是何人聞道陸張昔上隣
少家集 竹うらにかくして住ぬ人さあはれそ

竹をさす人あはれに似たるありらむそ

所思

此みくらやりにあふ不悔の言

白氏文集 日暮而途遠吾生已蹉跎
柳宗元詩 孤生易為感失路無所宜

西の谷北棹に流あり女共乃

羊ノららふをかんそ

羊流ふ女西りあふふあふの満し

西の谷集 西の谷の山を住らう山ては伊勢の
ふに東の浦入り山を住らうふた神主の山
を神流ふらう大いあまの流垂流とおひ
おひらみ侍る

海く入る神流乃事流たけぬとい

内宮のわら山流は西り谷合と力作る流あ
ちうは流るる山流りたる地ちり今うたを
ちりてむらうとちりてむらうと

石山へ流るるを

橋桁のまはら月乃名流るる

平田の如寺ありては
そくはくは二句

百年にけしむ城屋の首をふり

韓昌黎詩 天寒古寺遊人少落葉牕前有幾堆ルカ

子よかゝる涙やおぼえしちる紅葉

意法詩

三田のさしきりもみちらちり

おののけ藤ささし

とくふ枯るはしとらぬすま乃程

山家集

あかきくさの花はさきりもみちらちり

菊のほ大根の外はくさなり

元積詩 可是花中偏愛菊此花開盡更無花

杜園うらなとささし

まらしくしよん徳の家や白むし

夫木集人の位里れくはるよ本もさり

山後お東のきりけのやけ畑

ふる山此をさし相よふくはるん

堀の系人今貫はるをたのしきりてを一つ



のこわておくれ雑炊を考て食やうてその釜より
茶をこして學まなびしんノヤねあ

釜の釜おのれ口おれいして
雑炊あるとんかかるとな

くりちや熱うまたら橋りつ

白氏文集 村橋西路雪初暗

鞍馬くらま小坊こぼうまふや大根だいこん

大和物語

夕ゆふれんをもておとみちり
まふまふまふまふまふ

馬うま成なり之の眺ながるる雪ゆき如ごとくく丁てい雞けい

玉馬たまうま雪ゆき行ゆき歸かへ残のこ夜よ

霜しも根ねこももゆししゆゆの雪ゆき

凍こ雞けい未ま報ほう家け村むら曉あけ隱ひそ々々行人ゆき過す雪ゆき山やま

泉いづみ好この子こ

あふかーらもまもまもまも
まもまもまもまもまも

深ふか川がは八はち負ぢ如ごとく

糸いと買かひひちちの袋ふくろや投なげなりり

東坡六言詩云薄々酒勝茶湯粗々布勝無裳

閑居の箴 前望有

石いしの女をいいしし癖くせくく癖くせ癖くせのの言こと



錢起詩 陰塔明片雪寒竹響空廊
又林和靖詩 雪竹低寒翠
後京極殿

存とくくも舟の田はくや寒ぬ雨
庭のぬくも下まほりはく

許渾詩云 雁逐寒雨下空濠

とくみり馬之り氷る新法河

馬上吟 五里復五里住時無住時日將家漸遠
猶恨馬行遲 杜荀崔

あを林でて子杖わつる雪さう船

寒山詩 説衣不免寒

樹下集 此の居こけの衣よ身とやけり
ねのさあかぬ時りさうしことり

さうさくす志まきまき大陣ふ

山家集 さうのむ岸下のみりくも
こすれまきまきまきこあへ

ぬくまきまきまきのひて

雪のほろくこ雪は火桶うふ

阿佛十六夜記

あをさうやあふしたの免あふし
のこさうさうしことあふしあふし

雪はあや巢枝南にわしりて啼あふ

詩 幾多歸鳥夜還巢

あ牡丹らしきよ雪おかしき次

桑名本當寺の冷心虚栗の洞子に長唄よ乃
そのおもひも雪をよまひのちと作まてせり下條

熱田

遊心もあ鮎はりうひて七里まき

詩 孤舟簑笠翁獨釣寒江雪

こゝろに 予もあ飯を揚はん年のつら

養生論云合歡^{ハキイカラ}念萱^{ハル}艸^ル忘愁^ヲ 又煮野菜根^ヲ
送^ル残年^ヲ

盗人小達しつゝおもりの年のくれ

翁行脚のち後近江の野むをりこそ出賊^ヲ
あひ給ふつゝ宗祇はゆふも織^ヲあひ給ふ
わりの合をな

長明寺 ちやとねよんのちの移乃横田山
みづりの林うけをうけし

給ははれ甲斐の道とてはれ

後撰集 西四條糸をまきこみこし物一はれ
ちらんりあつて切りあてけりるるる糸をまき
給ふとてあつてあつて糸の枝をまき
伊勢の海のちのち給ふとてあつてあつてあつて

雑之部

三月の雨の候をとりて

世にふるも更ふ宗祇のやうにうむ

種知彦多祇の紀州の産姓ハ三善氏に版尾之
後乃住心院に教原都の門人となり連歌の
達人となりし事あり

世にふるも更ふ宗祇のやうにうむ

越後新瀉

海にゆき雨や出づるにそら

長干之俗以販為事以舟為家此商婦獨居求
親他舟之賈客 詩 君家住何處妾住有橫
塘

幻住庵記

宗鏡錄云世有幻法依神木等幻作人畜
宛似往來動作之相須史法謝還成神木

又史記註曰眩人眩者幻也為奇幻人也小顏曰今
之吞刀吐火植瓜種樹屠人載馬之術皆是也

深氏物語幻の巻に居令其死とありて
大正とてゆかりの事なきをぬん乃ありとありせし

石山は奥岩間の
身千手泰證法師建立ちるを
うしるふ

山ありふ分山とらふそのかゝる園を寺に名を傳ふ

左の如く
和銅年中分諸
國置國分寺
林に細き流を流りてむ

微子登法寺三曲二百歩ありて
爾雅曰山未及
上為翠微寒山

詩云層々山水秀
烟霞鎖翠微云云
八幡またせ給ふ神作ハ孫陀の



あぢくくふし 今年湖水の浪少たつひの

浮巢はなつしとゆへききすれはなれは

順徳院御製 唐詩や信の浮巢乃
いふてはすひつと世をたのむらん 新編

つとて垣ゆひふと一と卯月れと

いりそあふ入し山乃於ておとさくおひ

山家集 一と山乃於ておとさくおひ
おとさくおひと人やまうらん

にまの名跡も遠うとをたつと一と

あぢくくふしとてあぢくくふしと

白氏文集云 悵望慈恩三月盡紫藤花落鳥關
狭衣云 着はねあつとのおもつた

本朝食鑑云 桎鳥懸巢也 澁山堅木一
枝巢依 在桎鳥名云云 又或云 かし

未承はけくくくくくくくくくくく

魂号楚東南にんくくくくくくくく

杜律云 昔聞洞庭水今上岳陽
樓吳楚東南圻乾坤日夜浮

人ふふふふふふふふふふふふふ

史記云 舜彈五弦琴歌南風之詩而
天下治 王維詩 樓前舜樂動南薰

海日枝の山は良乃と根より辛崎の

鹿のふをて 坪のこ橋あり 初たきと 舟のり星

とわあに かゝる木 慈の心 山家集 草木の心

こまふうの 女のこや 山家集 草木の心

山田の早苗 たのま 山家集 草木の心

松の紙云 ながお月 山家集 草木の心

たかく喜 山家集 草木の心

謝靈運云 美景良辰 賞心樂事 四者難并 中

少見三上 山々士 峯の件 山家集 草木の心

古の 栖も ねの心 神名帳云 野州郡九坐之内 御上神社一名百足山又侶

に 近に 留ま 長明方丈記云 田之川と信り 積尾

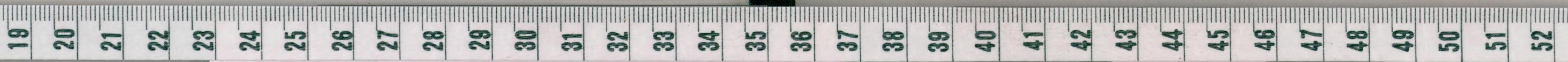
吉ん 長明方丈記云 田之川と信り 積尾

山獄 後九条殿等に 田とのけ

腰と 歌末

くろして 網代 歌末

たりの 万葉集 尾津の網代



去々ぬ農居沙口既小山の傍ふくく神を

朱晦庵詩云
野人載酒来

農談日
西文

初生志のくふ月を初てくく影をともひまひ

燈浅くしてを罔両くも邪とくくは
莊子云罔兩問景曰曩子

行今子止曩子坐今子起何其無持操與景曰吾有待而然者邪又類聚曰洞山竹禪師觀影作偈云切忌從他覓迢々與我疎我今獨自往處處得逢渠渠今正是我我今不是渠應須恁麼會方得喫如如云云
かくくくく

ひくくく罔寂とくくくく山野くくくくか

くくくく次
周易云蹇之時義大矣哉不事王侯高尚其事

くくくくく
西行等山くくくくくくくくくくくくくくくく
や病方人くくくくくくくくくくくく

くくくく
史記司馬相如嘗客游梁後以病免官居茂陵
くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

命の地をくくくくくく
換集抄云武勇はあはけはくくくくくくくくくくくく

とくくくく一陣くくくくくくくくくくくく
名利乃勝地のたふくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく

乃扉くくくくくくくくくくくく
寶林傳云達磨云明佛心宗行解相應名祖師臨濟錄云逢

佛殺佛逢祖殺祖云云芭蕉翁天和之頃常陸鹿島混本
寺佛頂和尚に參禪して嗣法せり三更月下入無何
くくくくくくくくくくくく

より那まの風雲くくくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくくくくくくくくく

芳くくく
風中のわらひに沈りくくくくくくくくくくくく

終身は能く生涯のそかりあはるるを

終身は能く生涯のそかりあはるるを

杜律云計拙無衣食究途仗友生

云人皆有一僻我

樂天を五臓の神と云ふ

老杜を瘦く

山谷曰老杜詩主於忠君愛國係一

論語云質勝文則野文勝質

則史文質彬然後君子

如露亦如電

應作如是觀

かゝるる也

かゝるる也

かゝるる也

かゝるる也

かゝるる也

かゝるる也

かゝるる也

三十一

まづたの心推乃。あもらる夏あま

愚按よ猿蓑一部ハ蕉翁の志願也

了調格安情あはるるのち也

第一のよとひあはるる

我らよとひあはるる

ふあはるる

ねほろけはるる

あはるる

前註出
あま畧

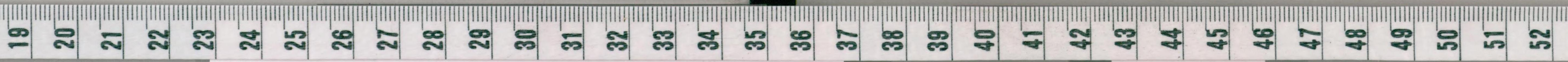
金剛經云一切有
為法如夢幻泡影

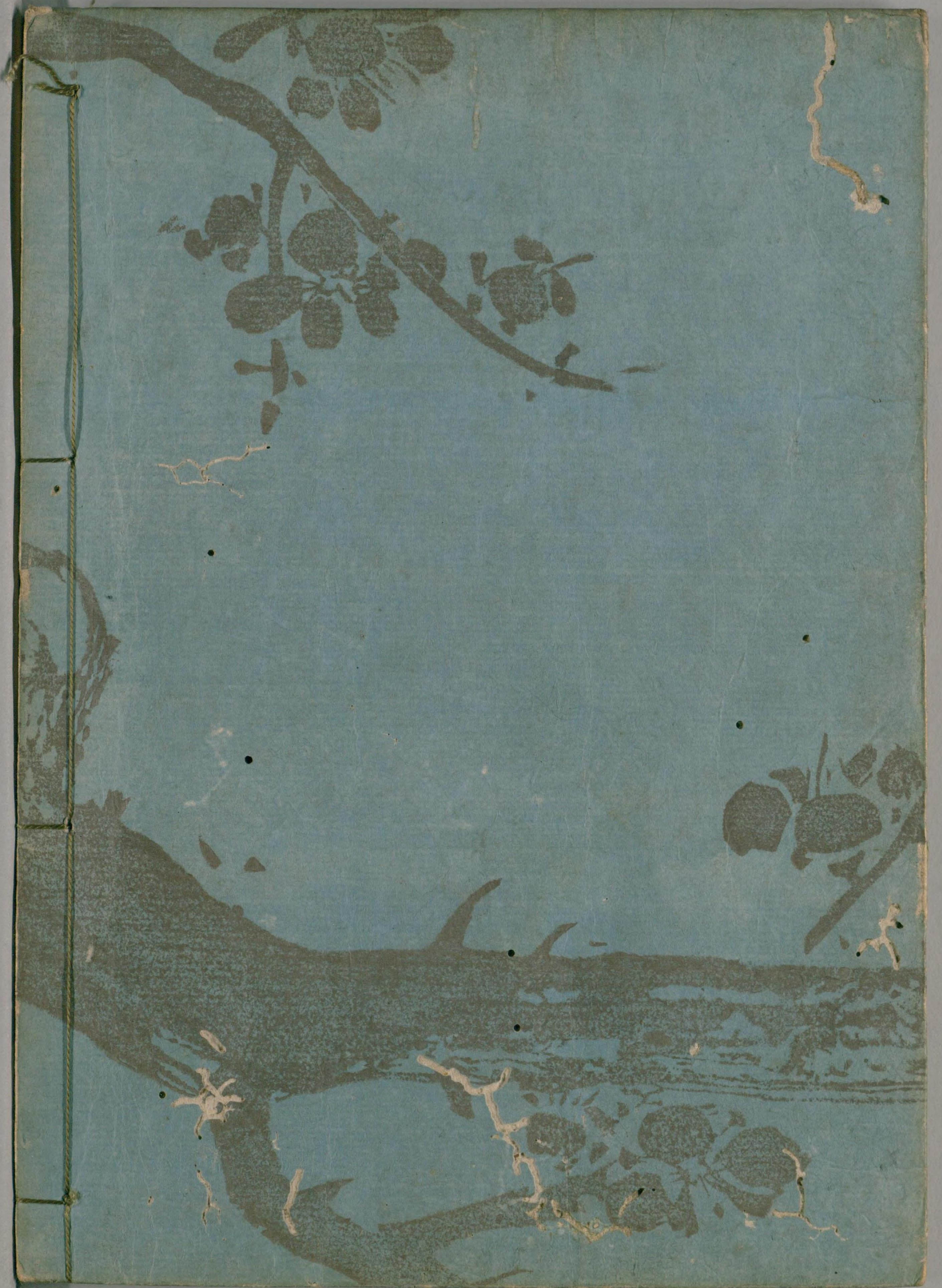
863
127

14200

文化三年丙寅五月

身實必魚... 橘屋治兵衛
井筒屋庄兵衛
奈良屋長兵衛





国立国会図書館 タイトル『桃青翁句彙後編』 請求記号 863-127

ガラス使用